

沖縄語の学習のための漢字の使い方の例（5枚）

2007年3月28日.

沖縄語研究家 船津好明

沖縄語に用いる漢字は、学習者の学習負担を少なく、学力の向上につながるものがあれば、それを優先すべきです。別の言い方をすれば、既存の共通語の知識が沖縄語の理解を助け、沖縄語の理解が共通語の知識を一層深め、言語素養の相乗的な高まりを期待できる、そのような漢字を使うことです。必ずあるかどうか分かりませんが、先ずそこから考えるのが順序と思います。学問、研究、文学などに向けた書き方は、また別です。

ここでは、沖縄語の学習者は共通語を知っているということが大きな前提です。沖縄語の一つの言葉に対して、共通語の漢字が幾つもあり浮かぶのは自然のことです。その中のどの漢字を用いるか、学習者にとっては沖縄語と共通語の関連性の強い漢字の方が、学習負担も軽く、覚える印象も強いことから、二つの言葉を関連づける要素があれば、その観点から漢字を絞ることとします。筆者は第一に音韻を挙げます。音韻は沖縄語と共通語を関連づける大きな要素です。これは、沖縄語を覚えるのに共通語の知識を上手に活かすことに外ならず、知識人の主張するところでもあります。こうすることによって前述の「少ない学習負担で学力の向上」が期待できると考えます。

沖縄語はまだ文字文化が熟していません。現在の沖縄語の書き手は、大体自己の流儀を持っていて、特に漢字の使い方の作法には翻訳型、つまり同じ意味の共通語の漢字を思いつくままに当てる傾向が見られます。それが各自の習慣となっていて、いつしかこれに執着することとなり、他の書法になじみにくくなっていきます。その結果、現在多くの書法が出現してひしめきあい、筆者の知るところでも8通り以上あります。

このような多様な書き方は、これから沖縄語を学ぼうとする人達を迷わせ、普及の障害になります。漢字の使い方は正にそうです。

漢字は、書き手が自信を持って書く分には、どんな漢字を使おうとも自由です。しかし、学習者にはそういう自信はありません。そのため、書き方の拠りどころを示す必要があります。この拠りどころは、書き方の一種の基準のようなものですが、拘束性は少なく、書き方に迷ったときに参考にしてもらえばよい、そのような性格のものであります。この拠りどころは、書き方の研究者や実践者が、意味、音韻、語の由来など、十分な根拠を持ち寄ってまとめる必要があります。学習者にそのような根拠を求めることは無理ですから、前もって漢字の使い方の拠りどころを示しておく必要があるわけです。

学習者は、卓越した教師の下では、教師の教えに忠実に従います。各教師が各人各様に教えると、覚える側も各人各様となります。それは後々普及の障害になります。それを避けるためにも、漢字使用の拠りどころは必要です。

沖縄語の漢字は、振り仮名を振らないと書き手と読み手の意図が合わなくなる恐れがあります。よって常に振り仮名を振ることとします。漢字は選択使用ですから、使いたくなければ仮名のままでよいことは、言うまでもありません。

以下の言葉は、筆者が沖縄語の普及活動の中で体験した例です。

例 1、うちなー。沖縄語辞典での説明：沖縄。本来は沖縄本島をさす。

沖縄語の 漢字候補	学習事項		共通語の主意	共通語との関係	
	音韻	意味		音韻	意味
沖縄(う ちなー)	共通語(おきな わ)と関連あり	共通語の沖縄と 関連あり	沖縄は概ね沖縄県 全域を指す		
琉球(う ちなー)	共通語(りゅうき ゅう)と関連なし	共通語の琉球と 関連あり	琉球は沖縄と大体 同じ	×	
南島(う ちなー)	共通語(なんと う)と関連なし	共通語の南島と 関連あり	南島は南の島の意 味	×	

説明：どの漢字を使うかは自由ですが、問題は読み手がどう読み、どう理解するかです。書き手と読み手と同じ情報を授受するのでなければ、意味がありません。

学習負担がより少なく、沖縄語と共通語の間に知識の相互補完をもたらすような漢字があれば、学力の向上につながりますから、それを使うのが適切でしょう。その点から筆者は「沖縄(うちなー)」を使っています。

例 2、かー。 沖縄語辞典での説明要旨：井戸。また、天然に湧いていて用水に使われるもの(樋で引いたものを含む)をさす。「川」に対応する。

沖縄語の 漢字候補	学習事項		共通語の主意	共通語との関係	
	音韻	意味		音韻	意味
川(かー)	共通語(かわ)と 関連あり	共通語の川と関 連あり(広義)	「かわ」は給水源 の総称(*1)		
井(かー)	共通語(い)と関 連なし	共通語の井と関 連あり	「井(い)」は水が 湧く所(*2)	×	
泉(かー)	共通語(いずみ) と関連なし	共通語の泉と関 連あり	「いずみ」は水が 湧く所(*3)	×	
井戸(か ー)*4	共通語(いど)と 関連なし	共通語の井戸と 関連あり	水を湧かせるため に地面に掘った穴	×	

*1 流れる川を含む。

*2 人工的。

*3 自然的。

*4 文献例あり。

説明：沖縄語の「カー」に当てる漢字の候補は他にもあります。問題は読み手がどう読み、どう理解するかです。書き手と読み手が同じ情報を授受するのでなければ、意味がありません。

学習負担がより少なく、沖縄語と共通語の間に知識の相互補完をもたらすような漢字があれば、学力の向上につながりますから、それを使うのが適切と思います。その点から筆者は「川（カー）」を使っています。

漢字を用いず平仮名のまま「カー」と書いてよいのは当然ですが、読み手が同音異義に受け取らないか、注意する必要があります。

例3、むい。沖縄語辞典での説明：丘。土が盛り上がって高くなっているところ。

森は文語。

沖縄語の 漢字候補	学習事項		共通語の主意	共通語との関係	
	音韻	意味		音韻	意味
盛(むい)	共通語(もり)と 関連あり	共通語の盛と関 連あり	盛(もり)は盛り あがったものの総 称		
森(むい)	共通語(もり)と 関連あり	共通語の森と 同・異の混用あり	森(もり)は大き な木が集まってい る所		
丘(むい)	共通語(おか)と 関連なし	共通語の丘と関 連あり	丘(おか)は小高 い土地	×	
山(むい)	共通語(やま)と 関連なし	共通語の山と関 連あり	山(やま)は高ま ったものの総称	×	

説明：沖縄語の「むい」に当てる漢字の候補は他にもあります。問題は読み手がどう読み、どう理解するかです。書き手と読み手が同じ情報を授受するのでなければ、意味がありません。

学習負担がより少なく、沖縄語と共通語の間に知識の相互補完をもたらすような漢字があれば、学力の向上につながりますから、それを使うのが適切でしょう。その点から筆者は「盛(むい)」を使っています。なお、琉歌など文語では「森」となっています。

漢字を用いず平仮名のまま「むい」と書いてよいのは当然ですが、読み手が同音異義に受け取らないか、注意する必要があります。

例 4、にし。沖縄語辞典での説明：北。西は文語。

沖縄語の 漢字候補	学習事項		共通語の主意	共通語との関係	
	音韻	意味		音韻	意味
西(にし)	共通語(にし)と 同じ	共通語の西と関 連なし	西(にし)は West		×
北(にし)	共通語(きた)と 関連なし	共通語の北と同 じ	北(きた)は North	×	

説明：漢字は、使用者が自信をもって書くのであれば、どの漢字でもよいものです。問題は読み手がどう読み、どう理解するかです。書き手と読み手が同じ情報を授受するのであれば、意味がありません。

西と北のどちらを沖縄語として「にし」と読ませるべきか、まだ定まらず混用のままです。

西と北のどちらがよいかは、少ない学習負担即ち容易に納得できるような方という原則で選びたいのですが、排他的に選ぶのは困難です。

沖縄語の「にし」の漢字に「西」を採用した場合、学習者（子供）が国語の時間に西を「にし」と読んで正常です。「きた」と読めば誤りです。共通語の西は共通語の「にし」で West、沖縄語の西は沖縄語の「にし」で North であるという分別が必要です。

沖縄語の「にし」の漢字に「北」を採用した場合、学習者（子供）が国語の時間に北を「きた」と読んで正常です。「にし」と読めば誤りです。共通語の北は共通語の「きた」で North、沖縄語の北は沖縄語の「にし」で North であるという分別が必要です。

このように、「にし」を西と書いても北と書いても、大変紛らわしく厄介な解釈となりますが、筆者は音韻優先の原則を取っているためと、文語などとの関係から「西」と書き、共通語の「にし」に対する沖縄語は「いり（入）」としています。なお、西原町、西武門、西ぬ海、西之平など、「西」には West と North の混用があります。朝飯（あさばん）と昼飯（あさばん）など、言文不一致の言葉も似た議論になります。

例5、くち。沖縄語辞典：口、語（言語名）等。

沖縄語の 漢字候補	学習事項		共通語の主意	共通語との関係	
	音韻	意味		音韻	意味
口(くち)	共通語(くち)と 同じ	共通語の口と関 連あり	「口(くち)」は「物 言い」などの意味		
語(くち)	共通語(ご)と関 連なし	共通語の語と関 連あり	「語(ご)」は「言 葉」の意味	×	
弁(くち)	共通語(べん)と 関連なし	共通語の弁と関 連あり	「弁(べん)」は「言 葉づかい」の意味	×	
言葉(く ち)	共通語(ことば) と関連なし	共通語の言葉と 関連あり	「言葉(ことば)」 は即ち言葉	×	

説明：沖縄語の「くち」に当てる漢字の候補は他にもあります。問題は読み手がどう読み、どう理解するかです。書き手と読み手が同じ情報を授受するのでなければ、意味がありません。

学習負担がより少なく、沖縄語と共通語の間に知識の相互補完をもたらすような漢字があれば、学力の向上につながりますから、それを使うのが適切と思います。その点から筆者は「口(くち)」を用いています。漢字を用いず平仮名のまま「くち」と書いてよいのは当然です。

なお、「おきなわご」は共通語による言い方で、漢字で「^{おきなわご}沖縄語」、沖縄語による言い方では「^{うちなーぐち}うちなーぐち」(「^{うちなーぐち}沖縄口」)となります。

以上の例や、音韻対応がない言葉も含めて、それに使う漢字が既によく使われているものであれば、慣用漢字とするのも一つの方法です。その場合も列挙して示すのが学習者にとって有り難いことと思います。(「人(ちゅ、っちゅ)」など)

(以上)